

NEWS LETTER

発行:水資源・環境学会

NEWS LETTER No.73

2017年1月13日

目次

2016年度 冬季研究会のご案内	1
2017年度研究大会のお 知らせ	2
2017年度夏季現地研究 大のお知らせ	3
2016年度夏季現地研 究報告	3
学会誌最新号の案内	15
事務局からのお知らせ	16

2016年度 水資源・環境学会 冬季研究会 ご案内

テーマ:「水と緑と企業の社会的責任」 -自然保護と企業のCSR-

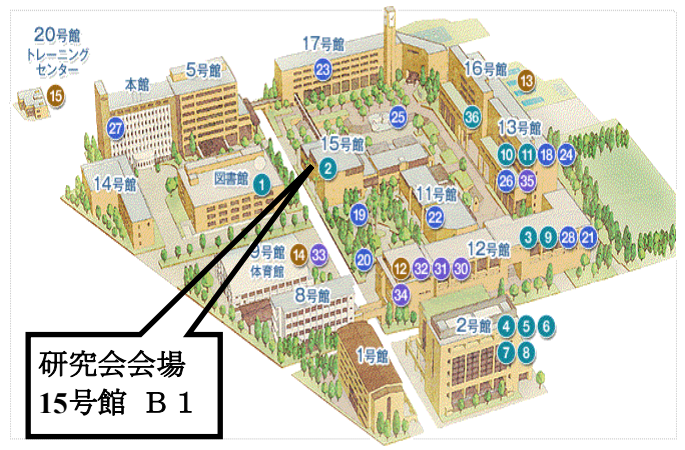
日時: 2017年3月4日 (土) 13時~16時30分
会場: 大阪学院大学 15号館15 - B1-01教室

大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 〒564-8511
電話06-6381-8434 (代表) <http://www.osaka-gu.ac.jp/>

近年、企業の社会的責任 (CSR) の一環として、水資源・環境保全や、森林管理に一般企業がかかわる事例が見られる。水 (水資源・環境) と緑 (森林) というキーワードはイメージが良く、企業のイメージ戦略の演出と見ることもできるが、それだけにとどまらず、社会と共有し守り続ける地域資源としての水や森林を積極的に保護・保全し協力したいという、企業の潜在的な意向を映し出している。たとえば、サントリーの「天然水の森」、湖南企業いきもの応援団による企業連携による生物多様性保全の取り組みはその好事例であろう。そこでは、水環境・森林管理問題の切迫、企業のあり方についての見直し、社外・社会からのまなざしの変化等によって、新たな共生の可能性を見出そうとしているのかもしれない。また、企業は、より意味のある社会的関係のあり方や方法を求めているとも考えられる。企業担当者・CSR活動参加者が、社会的活動を通じてやりがいを見出すには、さらに実質的でわかりやすい貢献が求められるだろう。こうしたことから、水と緑のCSRの企業側の論理を明らかにする必要がある。今回の冬季研究会では、本学会が従来強みを有してきた、問題発見型の市民参加の研究をふまえ、企業が水環境問題や森林管理問題にかかわる上での課題と将来性について考えたい。あわせて、自然の2つの大きな構成要素、水系と森林との対置により、新たな発見をも期待したい。

【プログラム】 13:00~16:30

- 水と緑のCSR: 事例の報告
- | | | |
|----------------|-------|------|
| 1. サントリーの天然水の森 | サントリー | 山田 健 |
| 2. 湖南企業いきもの応援団 | 団 長 | 南啓次郎 |
- 事例へのコメント
- | | | |
|----------|--------|-------|
| 1. 水のCSR | 滋賀県立大学 | 平山奈央子 |
| 2. 緑のCSR | 滋賀県立大学 | 高橋卓也 |
- 総合討論 司会 仁連孝昭



【会場へのアクセス】

JR東海道本線 「岸辺」 駅から徒歩5分、阪急京都線 「正雀」 駅から徒歩5分

2017年度水資源・環境学会研究大会のお知らせ

研究大会テーマ

「水資源の統合管理の可能性と限界～国内外の事例研究をふまえて」

古来、人間は水とともに暮らし、生きてきました。時が経ち、人間は水を利用し制することを考え、必要な技術を開発してきました。それは、利水に始まり、治水へと広がりました。当初、利水や治水といった特定目的の達成に努力が注がれましたが、近年では、水や自然環境の量的確保に加えて、質的な持続可能性が重要になり、流域という、まとまりのある空間における水資源を全体的に捉え、効果あるソフト管理が喫緊の課題として浮上しています。

ハードからソフトへの転機を迎え、流域の自然資源や社会資本を構成する個別の要素を有機的に連動させる理念として、「統べる」という概念が導入され、水資源を統合管理する基本的な考え方とその展開が試みられてきました。しかし、水資源の持続的な統合管理の統一的で有効な政策の必要性がいわれてきたにもかかわらず、現行の水行政の実情を見ますと、遅々として進んでいないようです。また、関連学会においては、その研究領域が多岐にわたるため、水資源の統合管理にかかわる研究は散見されるに過ぎません。

水資源の統合管理にかかわる課題解決の到達点は遠く長いですが、研究や議論の経緯や現状をふまえ、水資源の統合管理を真に実現するための学際的なアプローチを再考することは、水資源の統合管理の考えや政策の熟度を高めるうえで、学術的にも実践的にも大きな意義があると思われまふ。

そこで、2017年度の研究大会は、水環境を含め水資源の統合管理問題の所在を明らかにし、水資源の統合管理の可能性の条件とは何か、その限界はどこにあるのか、といった論点を軸にすえ、学術研究交流をしたいと考えています。

幸いにも、本学会は、多様で多彩な専門分野にかかわる会員からなるため、水環境を含め、水資源の統合管理を多面的に論じることができます。また、研究大会は、一般の方にも公開していますので、複眼的な見方に立って意見交換ができます。こうした本学会の長所を伸ばすうえで、会員はもとより、友人や知人に周知していただき、多数の方の参集により、積極的に活発な議論を交わしたいと考えています。

まずは、上述しました主旨を理解していただき、会員からの研究発表を公募しますので、下記の要領にそって応募していただきますよう、ここに案内します。

【日 時】2017年6月3日（土）10：30～17：30

【場 所】立命館大学・大阪いばらきキャンパス
大阪府茨木市岩倉町2-150

【発表応募締切】2017年3月31日（金）

【研究発表区分】① 自由論題 ② 研究大会テーマ論題

【応募要領】 自由論題、研究大会テーマ論題ともに、下記の5項目を必ず記入のうえ、期日までに、若井郁次郎へお送りください（E-mail：wakai@due.osaka-sandai.ac.jp）。

【必須記入5項目】 ①「研究発表区分」、②「タイトル」、③「報告者氏名（複数者の場合、発表者に○）」、④「400字程度の要旨」、⑤「E-mail address」



2017年度夏季現地研究会のお知らせ

「琵琶湖とその集水域、そして源流へ」

2017年は、1997年3月に琵琶湖総合開発事業が終結して20年目に当たります。しかも、2015年秋には国会で「琵琶湖保全再生法」が成立し、これにもとづいて2016年度末には「琵琶湖保全再生計画」が策定される予定です。

琵琶湖をめぐる状況が新たな段階を迎えたのを機に、2017年度夏季現地研究会では琵琶湖とその集水域の要所を訪ねるエクスカージョンを企画中です。くわしくは、次号のニュースレターでお伝えします。

開催予定：2017年8月下旬、1泊2日

2016年度 夏季現地研究会報告

台湾学術訪問団代表
若井 郁次郎

あらまし

2016年8月21日（日）～24日（水）の4日間、本学会が毎年、定例行事として実施しています、夏季現地研究会を台湾国・台北市を中心に行いました。今回は、台湾国・台北市において公的機関や大学の研究者との国際学術研究交流だけでなく、さらに台湾の熱帯風土に順応した水資源・環境にちなむ関連施設を視察し、知見と見聞を深めることを目的としました。学術訪問団は、北海道や関西・中部で活躍されています、研究・教育者や実務者の7名、大学院生6名の総人数13名（下記参照）の多様な専門分野と幅広い年齢層の構成になりました。

一行は、ほぼ計画しました旅程（NL No.71参照）にそって、21日は臺北自來水園區（旧台北水源地、現在、水道博物館）、22日は臺灣行政院・農学委員会・林業試験所での国際学術交流と熱帯植物視察、23日は故宮博物院での中華文化の視察、國立政治大學及び輔仁大學との国際学術交流、と充実した滞在予定を終え、24（25）日、無事に帰国しました。それぞれの訪問の詳細は、以下において参加者の眼から報告されています。

なお、主要訪問先、会員、大学院生の報告構成にしています。

【訪問者13名】

【会 員】

秋山 道雄
伊藤 達也
川合 千代子
高山 進
野村 克己
若井 郁次郎
若菜 博

【法政大学大学院】

高橋 裕
吉原圭佑
毛 鳳雨
劉 韓玲
朱 晔蕾
程 先進

林業試験所と台北植物園

野村 克己（サンコーコンサルタント株）

若井団長以下調査団一行は22日（月）午前10時から台北植物園に隣接した林業試験所で陳燕章林業技術服務組長以下研究員と交流（写真1）した。陳財輝育林組研究員から植物園及び林業試験所の説明を受けた。また全団員から試験所に1問ずつ質問をし、回答を受けた。

台北植物園の始まりは日本統治時代1896年の台北苗圃である。その後1911年に殖産局林業試験場、そして1921年に台北植物園と改称した。



写真1 林業試験所職員と記念撮影

（前列左端が呂顧問，中央が陳組長，後列中央が陳研究員）

当初5haほどであったが、現在は約8ha、約2,000種の植物が収集されている。園内を19の植物区に分け、「文学区」、「薑(はじかみ=しょうが)区」、「竹区」などユニークな区もある。また、園内には当初総督府に利用していた「欽差行臺」、統治時代の職員宿舎に利用された和建築「南門町三二三」も移設展示されていた。

苗圃の設置目的は、台湾統治の当初全土の約80%が森林に覆われていたが、産業資源の全体像はまだ不明であったことから、台北苗圃及び恒春熱帯植物殖育場を設けて林業との関係を調べることであった。現在では調査・研究・植物保育の他、世界の植物園とネットワークを作り地球規模の植物多様性を推進している。

午後から園内を呂錦明顧問(退職後16年のOB)の案内で植物園を見学した(写真2)。園内には大王椰子(1898年導入)が多数植えられていたが、第2次大戦の末期に米軍の焼夷弾や機銃掃射を受けた跡が痛々しく残る椰子が並んでいた。

黄裕星所長(出張中につき陳組長が代理)から記念に書籍を頂いた。呂顧問、陳研究員(いずれも竹の研究で京都大学滞在経験あり)から日本語で分かりやすく丁寧な説明があった上、今後もシンポジウム開催等で交流したい旨申し出があり、当学会としても実現に向け検討の必要がある。



写真2 呂顧問による植物園見学

台北自來水園區及び自來水博物館

台北の水道事業の概要を知るため、関西空港から出発した5名が21日(日)の到着日午後自來水園區(水公園)内にある自來水博物館(写真3)を見学し、説明を受けた。この地は当初水源地として1909年完成した浄水場の一部であるが、主な浄水機能を直潭浄水場に写し、台北自來水(水道)事業の歴史・現況を解説、展示するとともに、草創期の水道事業に貢献したW. K. バルトンらの功績を顕彰し、市民が水や自來水に親しめる公園として開放(写真4)している。



写真3 自來水博物館(旧ポンプ室)



写真4 当時のポンプの横でコスプレ撮影

日台国際学術交流

若井 郁次郎(大阪産業大学(非常勤))

日台国際学術交流は、8月23日午後、官大偉(国立政治大学・民族学部・准教授、専門：地理学と民族学)と、呉剛人(輔仁大学・教授、専門：法学)の両先生を天成大飯店の会議室に迎え、開きました。官氏は基調講演を、呉氏は通訳を兼ねて補足説明をそれぞれ行った。基調講演の演題は「台湾原住民と水資源——民族の生態学的観点」(試訳)でした。この報告は、官氏が先住民のタイヤル族(高山族)出身(大陸系住民は先移住の本省人と、後移住の外省人に分かれる)とであることから、自身の体験を含めた「人と川の共生」を中心とした内容で、その大意は、次のようであった。

川の流域に沿って、いくつかの部落があり、それぞれアイデンティティがある。例えば、歌謡の中に川が描写されている。しかし、ダムが建設され、約20年近く水資源の危機に直面している。その後、2006年—2011年の政府5カ年計画が作ら



れ、ダムを中心に川上、ダム、川下と区分された。そして、河川計画を理由に先住民の活動を制限しようとした。さらに先住民を雇い、先住民を監視しようとした。先住民にとっては迷惑であった。こうした政府のやり方に反対して部落を守ることにし、高度な知識を共有し本当の参加を考え、エコツアーを始めた。タイヤル族は、稜線を越え移動し続けるので歌謡により知識を流動させ、言葉で次世代に伝える。政府は川を境界線とするが、先住民にとって川に境界はない、という自然な考えがある。そして、ものをシェアするgagaという憲法のようなものがあり、内容は多岐にわたる。川との共生として、例えば本流では魚を獲り、支流では魚を育てる。そして、川は、社会に対して複数の意味、つまり象徴、空間および場所を意味する。しかし、近代国家になり、川との関係すべてが変わり、水は平地の人に供給するものとなり、洪水予防により先住民の土地利用は制限され、人の関係が変わった。見方を変えれば、森林治水、分区や区分けといったことは人為的であり、先住民を閉じ込めることに他ならない。旧日本政府のダムを引き継いだ国民党は、水を支配している。ダムは先住民の記憶（文化）を永遠に破壊している。その後、国家はタイヤル族が中心になり活動するように転換した。それは、先住民が最も危険な崩壊地を知っており、古来、そこに植林し、自然を回復させてきた伝統的知識や経験が有効に活用できる。2004年、同じ場所に2カ所の崩壊があり、1カ所は先住民が回復させた。政府は参加型管理としているが、先住民の伝統的知識を取り入れのが、本当の参加型管理である。

以上の経緯などをふまえると、伝統的知識は環境に良い影響をあたえる。

この官氏の締めくくりの言葉は、含蓄があり、ともすれば近代技術を自然環境に過度に応用することへの警告ともいえる。最近の技術者や実務家は、自ら現地に入り、丹念に自然環境を観察することが少なく、そのため地域風土や自然環境の特性を十二分に捉えきれていないように思われる。そして、思い出されるのは、戦前、台湾・屏東県（現県名）に地下式ダム「二峰圳」（にほうしゅう）を設計し造った、農業土木工学者の鳥居信平（とりいのぶへい）である。今回、日本の衛生工学と近代上下水道を広めた、スコットランド人の技術者のウィリアム・K・バルトンの功績の視察に続く、夏季現地研究会の候補として準備しておこうと考えている。あわせて、戦前に統治時代、台湾で生まれて育ち、戦後、日本に定住した日本人「湾生」の人たちの事跡をフォローしたと思っている。それには、まずはドキュメンタリー映画「湾生回家」（わんせいはい

か）を鑑賞することであろう。このような台湾への思いを実現したいと考える毎日である。



写真 官大偉準教授の熱意ある講演

Q&A

Q： 現在、植物資源は、薬品開発にとって重要な資源として注目されています。その理由は、植物から抽出される成分が疾病の特効薬になることが明らかになって来たからです。そのため、欧米の製薬会社は、古来、原住民が利用してきた薬用植物を世界中で調べ、また熱帯植物の成分分析に熱心に取り組んでいます。そして解明された有効成分を知的財産権として特許化したうえで、商品として販売し莫大な利潤を上げています。こうした背景より、林業試験所では、植物、特に熱帯植物に由来する薬効成分の調査や分析を行っているのですか？

A： 現在の林業試験所では、植物由来の薬効成分の調査は十分にできていません。また、熱帯植物の薬効成分の分析部門はありません。しかし、医学系や薬学系がある大学に試験を依頼するなど連携して進めています。これは、今後の重要な調査・研究であると考えています。

刺激的な日々

秋山 道雄（滋賀県立大学（非常勤））

5年前の夏、学会のエクスカージョンで台湾を訪れた際には、台北は入国と出国の通過点に過ぎず、主に台南の都市と農山村をめぐる。そのため、台北についてはほとんど知らないままであった。その空隙を埋めるように、今回の夏季エクスカージョンは台北が中心となった。出発前には、台北で水と環境をめぐる問題を把握するとすれば、5年前とは逆に、大都市を対象としたものに限定されるのではないかとみていた。ところが、実際に現地へ出かけて、良い意味でこの予想は裏切られた。

8月22日(月)に訪れた台湾行政院農業委員会林業試験所では、主なスタッフからの歓迎を受け、林業試験所の組織と職務の内容を伺った後、林学専攻の陳財輝研究員から林業試験所付属の台湾植物園に関する歴史と現状について説明を受けた。陳研究員は、日清戦争後、日本の台湾統治時代に植物園の基礎ができて以来の経緯を丹念に紹介し、あわせて報告は現在同試験所が取り組んでいる研究や事業の内容に及んだ。森林と水資源の関わり、水循環を介した森、川、海のつながりと流域の役割、さらに沿岸域ではかつてマングローブ林が卓越していたが、沿岸域開発によって特に西海岸では減少してきたという経緯、など日本のこれまでの経験と引き比べて納得のいく部分と、台湾ならではの問題の展開が紹介されて新たな課題に遭遇したと思える部分が混交し、話を聞き終えて充実した時間を過ごしたという実感をもった。



さらに、16年前に同試験所を退職された呂錦明顧問は日本語の堪能な方であったが、森林保全に関する自然保護運動の展開を受け、林学の専門家として森林の保全と利用をめぐる問題状況に対して、これまで培ってきた見識を披露された。端的に言えば、「wise use賢明な利用」に関わる見識とあって良いが、この話を聞きながら台湾と日本の経験と知見はかなり議論を深めるところまで相互に進んできているのではないかと思えてきた。

昼食後は、陳研究員と呂顧問に植物園を案内して頂いた。ここは、午前5時から夜の10時まで、年中無休で、市民に無料で開放されている。大都市の真ん中で、生物多様性の実態に触れる機会を提供しているわけで、その啓蒙的効果は大きい。さらに、イギリスの植物園が試みている自然教育の方式を体系的に学んで、2007年度からはこの植物園でも実施しているという。研究のみならず、環境教育の面でも野心的な試みを進めているところが垣間見えた。時間の関係で、これに関する詳しい話は聞くことができなかつたが、それがこの植物園の関係者に与える

影響は以外に大きいのではないかと想像された。むしろ、市民や市民の子弟に対する影響については改めて述べるまでもないであろう。植物園の社会的使命という点について、見識をもった運営がなされていると認識する機会となった。

林業試験所を訪れて、上のような経験を経た結果、今回の台湾エクスカージョンは予想を越える成果があったと想像していたところ、8月23日(火)の国際研究交流会では、さらに予期しなかった出会いと研究成果の披露に遭遇することとなった。

国立政治大学民族学系の官大偉副教授は、地理学と民族学の境界領域に関する研究を進めている少壮の研究者である。自らが台湾の少数民族出身であるが、その特性を活かして先住民と水資源に関わる研究を進めている。台湾でも、政府は河川上流域にダムを建設し、そこに住んでいた少数民族は居住地を追われるという事態がいくつも発生していた。政府は、近代科学の知見にもとづく土木事業の展開が経済開発に寄与するとみて事業を進めてきたわけであるが、自然災害に対する対応では近代科学にもとづく復旧事業は必ずしも効果を発揮させていない。一方、少数民族が山や、谷や、川について蓄えてきた多くの知見が、土砂崩れなどの自然災害に対する復旧に効果を発揮していることが具体的な事例をもって示された。したがって、こうした「場の知 local knowledge」を公共計画や公共事業に活かす(統合する)ことが、今日において求められる課題だというのが報告の趣旨であった。報告内容は、周到な調査と適切な情報処理にもとづいており、かつ分析枠組みもきちんと組み立てられた優れた内容であった。他の国や地域との比較研究のもとにおけば、さらに深めた議論を誘発するであろうことが予想できた。今回、研究交流会でここまでまとまった報告に接するとは思っていなかったもので、大きな収穫を得たという思いである。

官副教授の報告を通訳された輔仁大学の呉豪人副教授は、京都大学で学位を取得した法学の研究者である。法の解釈学に向かうよりは法社会学的な方向に対する関心が強く、少数民族がもつ慣習法的な世界の研究を進めようとしているこれまた少壮の研究者である。今回は通訳に徹されてご自身の研究は披露されなかつたが、フリーディスカッションの場で、今年になって台湾では国民党から民進党へ政権交代がなされたが、その後、新聞によれば蔡総統は政府がこれまで少数民族に対してきた処置を謝罪するという報道があつたけれども、あの記事と今回の報告との間に何か関連があるのかと問うたところ、呉副教授からは自分たちがあの声明文の作成に関わっていたとの発言があつた。官副教授は学会の最



中を抜け出して交流会の報告にみえたそうで、すぐ学会に戻らなければならないため、お二人とはじっくり話ができなかったが、今後の台湾政府の少数民族に対する政策が少数民族の水や環境に関する local knowledge を活かすことになるのかどうか見守っていききたいところである。

こうした経緯を経て、8月24日には帰国の途につくこととなった。予想を超える事象がいくつも重なり、それが研究と実践に関わるものであるだけに、帰国した今も台湾での経験を反芻している。暑い夏はやがて終わりを迎えるであろうが、台湾で発したさざ波は当分収まりそうもない。

台湾・台北ツアー

伊藤 達也 (法政大学・文学部)

8月21日から25日にかけて、台湾・台北ツアーに参加した。今回のツアーには、私が担当する「現地研究」という講義を絡めさせていただいたため、法政大学の大学院生6名を同行させていただいた。ツアーを主催された若井先生には大変なご苦勞をおかけし、ただただお詫びするしかない。ただ、そう言えば数年前の台湾・台南ツアーの時も「現地研究」を絡めさせていただいた記憶がある。こうなるとたちの悪い確信犯か(苦笑)。

いずれにせよ、水資源・環境学会でこのようなツアーを開いていただくと、学生をどこに連れていくか、毎年悩まされている教員にとって本当にありがたい。さらに他大学の先生や社会人との交流もでき、一石二鳥、いや三鳥くらいのありがたさがある。今回も、台湾の環境問題を、現場に関わる人や専門家から伺うことができた。さらに今回は6人の学生のうち、4人が中国人であったため、彼らにとっては、専門的な話だけでなく、台湾そのものへの関心を満たすことができるプログラムとなったのでは。もちろん、日本人にとって最も行きやすくそして安定した外国である台湾であることから、2人の日本人学生にとっても得ることが多かったのではと思う。そして言うまでもなく、私にとっても得ることが多かった。

1つだけ言うとすれば、山地少数民族と環境保護との関連である。質疑の中で「日本にはアイヌがいるじゃないか」と言い返されたが、ちょっと違うと思ひ、質問し返してしまった。「誰が環境を守るのか」。日本において、もはや体に染みついた経験と信仰に基づいた環境保護はかなり困難な気がする。だからと言って、都市に住む市民グループによる環境保護活動で、日本全体が守られる気もしない。改めて宿題をもらいました。本当にありがとうございました

ました。

Q&A

Q: 日本では山間部の環境保全、森林保全のために「森林環境税」を設置して、下流の都市住民が山間部の環境保全、森林保全を行う仕組みができつつある。台湾にはそのようなシステムはあるのか、という質問をした。

A: 答えは「ない」。その理由は「台湾には山間部に少数民族が住んでおり、仕組み作りが難しい」だったと思う。たまたま、翌日の専門家の講演の中で別の角度からの少数民族による環境保全の話聞くことができた。理解が大きく深まりました。

台北訪問記

川合 千代子 (水環境もやい研究所)

この度の視察研修、若井先生を初め皆様方や現地対応の良さに、深く感謝致します。台湾は初めてですが、飛行場に近づくにつれ溜池の多さに驚きました。その次に現れたのは屋根に備えられた多くの水タンク。野村様より現地の水事情は資料より感じていましたが、台北の都市を支えるには淡水の確保が大切だという事と、浄水場の役目や、水源維持のご苦勞も理解出来ました。

日本の植民地時代に築かれた宿舎や庭園になつかしさを感じます。私は職業柄、台北植物園内の井戸ポンプが気になりました。井戸元は地形から考察して、日本式の手掘り井戸で、ポンプアップして温室等に送水している物と見受けました。島国での水確保は厳しいものですが、かつてミクロネシア連邦の日本式井戸を多く調査した経験から、その当時より残されている井戸と思われます。近くで成長している木に、戦争時の銃口穴が残っているくらいですから。

林業試験所の研究交流において、山からの自然を無視してコンクリート工事が行われている報告がありました。それに対して私の身近では「岐阜県自然



写真 昔の良き伝統の見直し

工法研究会」にて努力している発言をし、関心が持たれました。ホームページを参考にいただければ幸いです。環境と市民の立場で参加していますが、女性会員が少ない為、設立以来ずっと理事の立場で発言しています。

林業試験所入口にありました非売品のCDとDVD「飛天友愛・浄歌悦舞」私の手元に12枚あります。素敵な演歌、いつか学会懇親会に持参します。

台湾の「原住民族」と環境

高山 進（元三重大学）

私が一番印象に残ったのは台湾の「原住民族」と環境をめぐるお話であった。台湾行政院農業委員会林業試験所では「国有林と原住民の所有地が重なっており、国有林管理業務がなかなか思うように進められない（ことが問題である）」といった発言があった。そして翌日、タイヤル族出身の研究者官氏から「台湾原住民族と水資源」のお話を異なる視点から伺うことができ、興味を惹きつけられ、帰国後にそうしたテーマの背景について思いを巡らせた。

官氏のお話では、原住民族は山の環境と共生する知恵を持っており、上下流の集落間の助け合いや共通のルールを守りながら暮らしてきた。2006年の台風によって大量の土石流がダムに流入した際に、政府は「上流の土地利用が問題である」として、「参加型管理」と称して原住民を雇い、監視にあたらせたとのことであった。菅氏は監視員のワークショップを行い、むしろ問題を引き起こしているのはいくつかの行政部署による開発であり、原住民はむしろ問題を包括的な視点から見ることができ、修復の方法を提案、実践できることを確認したという。そして「参加型管理の真の意味を分かってほしい」「土地を先住民に返すことは、国全体のためになること」と述べた。

帰国後の（にわか）学習で様々な背景に気付くことができた。日本が台湾を植民地にした後、「産業政策」は順調であったが「理蕃政策」（原住民族の帰順政策）はなかなか進まず、抵抗する部族を鉄条網と暴力で山の奥へ奥へと追いやり、明治42年には鉄条網の総延長は470kmにもなったという（乃南アサ『ビジュアル年表台湾統治50年』講談社）。台湾総督府は先住民族の活動域を国有化し、その政策が戦後国民党政府にも引き継がれた。

1980年代後半から原住民族は台湾の民主化と歩調を合わせ、権利回復運動を進め、主要なテーマの一つが土地に対する権利回復であり、国有造林地等の返還、保留地所有権の承認・拡大等を要求してきた。その国有林の管理部署が台湾行政院農業委員会である。今年

の8月初めのニュースでは蔡総統が「原住民族が過去400年に受けた苦痛や不公平な待遇」に対して謝罪し、新政策を検討する委員会を総統府に置き自らが委員長を務めると述べた。官氏や当日通訳と講演をされた呉氏らは政府の原住民政策のアドバイスをされているとのことであった。

台湾の原住民族の苦難の歴史に対する日本の責任、文明化と伝統的な暮らしの共存のあり方等大きな宿題を与えられた旅であった。



台湾的魚附林（「漁業保安林」）

若菜 博（札幌国際大学・人文学部）

台湾行政院農業委員会林業試験所研究員（育林組）陳財輝氏から「漁業保安林」に関する情報を得ることができた（2016年8月22日台湾行政院農業委員会林業試験所にて）。「漁業保安林」とは台湾の「魚つき保安林」（台湾的魚附林）のことである。

陳財輝氏の報告は「臺北植物園之歴史及現況（The history and status of Taipei Botanical Garden）」と題するもので、もともと台北植物園の歴史および概況を紹介するものと聞いていたが、パワーポイントで「感謝聆聽 敬請指正」と表示があり、これで最後と思ったら、その後、いきなり台湾的魚附林（漁業保安林）の話題に移った。これには、正直、予想もしてなかったのが驚かされた。陳財輝氏の報告（全体で56枚のパワーポイント）のうち、台湾的魚附林の部分は11枚をしめた。

陳財輝氏の報告の概要は以下のようなものであった。①「漁業保安林」は日本の魚附林にその源がある、②1907(明治40)年には保安林として指定・編入されている（※ちなみに日本で森林法上の保安林制度が始まるのは1897(明治30)年）、③現在では25地点に漁業保安林が指定されてい



る、④2016年時点で漁業保安林は4,748haをしめ、海岸の保安林は「防風」「潮害防備」「飛砂防止」「漁業林」の4種類がある、⑤漁業林の主要目的は、遮蔽陰影で魚を集め、枯枝落葉が河・海へそそぎ分解して魚の食料となることにより沿岸漁業に有利に働く。

上記の説明は、日本での魚附林や海岸の保安林でのとらえ方とほとんど同一のものである。台湾での魚附林に関する貴重な情報を得ることができた。台湾での魚附林等の現地調査も機会を作り、実施したいところである。

なお、陳財輝氏が魚附林について時間をさいて下さったのは、事前に野村克己氏が陳財輝氏に私の魚附林に関する報告資料を送付して下さったことによる。野村克己氏および陳財輝氏に感謝申し上げる。

臺灣的魚附林(漁業保安林)

- 臺灣的漁業保安林源自日本魚附林的概念，期望營造森林、河川及海洋三者間生態系平衡，藉此增加海洋生物資源。
- 臺灣的漁業保安林最早編入紀錄係1907年於屏東縣小琉球，編號2411、2412，之後陸續增加，日治時期編入共有19個，包括新北、宜蘭、屏東、澎湖、雲林及臺東等地。
- 國民政府來臺後，在宜蘭、臺南、屏東、花蓮4處增設6個漁業保安林，故現今全臺共有25個漁業保安林。

陳財輝氏の「台湾的魚附林（「漁業保安林」）の報告 2016年8月22日（講演資料より引用）

台湾で得たもの

高橋 裕（法政大学大学院・人文科学研究科・地理学専攻）

筆者の台湾への渡航は初めてであり、行政院農業委員会林業試験所や故宮博物院などを訪れて多くのことを学んだが、ここでは特に官大偉先生による台湾先住民族と水資源に関するご講義で得たことを中心に述べていきたい。

官大偉先生は政治大學民族系副教授で、泰雅（タイヤル）族である。石門ダム集水域における整備計画や「参加式」流水域管理方法、河川流域にある集落の発展に関するご研究をされている。泰雅族は台湾約2千万人いるうちの8万人余りの先住民族であり、主に台湾北部から中部の脊梁山脈に居住している。

泰雅族にとって河川は生活の場であり、喜怒哀楽とも密接に結びついている。世界の中心であり記憶や身体経験そのものであるという。歌謡にも表現され、日常や習慣の社会規範・独自の知識体系とも深く関連している。河川は台湾行政からすると境界として捉えられるが、泰雅族からすると流域にある他の集落との結びつきや資源を得てシェアする媒介となるものでもある。

近代国家にとって河川は水を供給することを第一優先し、洪水防止や用水確保のため土地利用を制限したりする。ダムのように水をせき止めたり現代的工法で流域を整備したりするが、それは周囲の自然を減らし、回復力もなくしてしまう。泰雅族からすると民族としての記憶の喪失にもつながる。先住民族は野蛮と思われることがあるというが、先住民族の知識体系も最新科学の知識体系とともに優れたものであり、その土地に根差したものである。先住民族の伝統的な知識や技能・方法も導入して水資源や自然環境と調和していくことが大切であり、それが先住民族の政治への「参加」でもあるはずだという。

現代的な技術と力を以って自然を治めていくという強引なやり方は通用しないであろうことは筆者もこれまで考えてきたことである。この論理は世界のどの地域においても同じであろう。官大偉先生のお話で再認識することができた。

このほか、台北植物園でテーマ展示区ごとに整備された数多くの植物を見学したり、故宮博物院で美術に触れたりした。夜市に行った際は、涼しい夜が貴重な活動時間というような、暑さの厳しい地で過ごす人々の様子も感じられ、大変貴重な機会であった。



Q&A

Q：台湾の森林面積のうち半分が竹であるというが、台湾における竹の植生的な意義は何か。

A：台湾で見られる竹の種類は大きく分けて4つあるが、面積の広がる種類の竹は災害防止、土砂崩れ防止などに効果がある。また二酸化炭素の吸収も普通の森林より数倍もある。竹は社会的に良い影響が多くみられるが、政府はそれが分かっているが、認めていない。

水資源・環境学会夏季見学会に参加し台北で得たもの

吉原 圭佑（法政大学大学院・人文科学研究科・地理学専攻 修士課程2年）

今回の夏季見学会に参加し台北で得たものは、現地に赴くことの重要性和、語学的重要性をそれ

ぞれ再認識したことである。

前者については、まさに「百聞は一見にしかず」であり、現地に行くからこそ体感でき、考えられることがある。今回は台湾の人々の「親日ぶり」を軸に振り返ってみたい。

台湾の人々は親日であるというが、それはどのように、どの程度のものなのか私は考えあぐねていたが、それは街の至る所で見つけられた。例えばゲームセンターの遊戯具は日本語標記の物も多く、クレーンゲームの商品には日本のアニメキャラクターも数多い。主要駅前にはユニクロや吉野家が、台北駅地下商店街の角地には地元寿司チェーン店が立地し、日本女優を大々的に起用する女性化粧品の広告であったり、本屋では日本の雑誌をそのまま販売していたりと、インターネットの情報では測りかねる若年層を中心とした親日ぶりを体感できた。台湾も中国である以上、政治面では日本と微妙な関係にあるが、同じ漢字圏であり親日感情に沸く台湾と、経済や市民レベルの交流は続けねばならないとの着想を得ることができた。

後者については、台北植物園及び呉教授による講演で、語学の重要性を強く認識した。私は日本語以外での講演は初めてである一方、隣席の中国人留学生は先方の中国語で理解していた。私は大学生の時分に中国語講義を受講しており、また、中国語は漢字であるから音ではなく文字であれば意味がある程度分かるが故に、もし先方の講話を中国語で聞き取れるならば、情報をもっと伺えたのではないだろうかと思ひであった。訪問先が国内でもなく、漢字圏ではない海外でもなく、漢字圏の台北であったからこそ得られた感情である。言語を理解できるということは、現地の方々からより多くの考えを伺うことが出来、先方への関心や敬意、相互理解を加速度的に促進できる手段なのだ実感した。一朝一夕に語学（文化理解なども含む）は身につくものではないから、私も漸進的に努力していかねばならないと思いを新たにすることができた。

わずか5日間の行程であったが、私的旅行では体感できない濃密な訪問であった。上述の認識も含め、今回の台北訪問で得られた貴重な経験や新たな考えを、今後の生活に活かしていかなければならない。

Q&A

Q： かつて22haあったと仰った台北植物園の面積は、現在8haにまで縮小してしまっている。なぜこのような結果になってしまったのか。原因は、都市開発や経済発展によるものなのか。

A： 政府が故宮博物院等（※）を拡張するために夜に行った不法占拠が原因であり、経済発展とは関係ないと考えている。

※ 先方は「故宮博物院等」と仰っていましたが、おそらく正しくは「国立歴史博物館」や「国立台湾芸術教育館」の事を指しておられたのだと思われます。

台北現地研究で得たもの

毛 鳳雨（法政大学大学院）

今回は台北現地研究に行き本当によかった。最初は、現地研究といっても旅行だと思っていた私が、本当に何の準備もなかったで台北行きの飛行機に乗ってしまった。8月21日から8月25日、五日間の旅は短かったが、台湾は初めての私にとっては本当にいろいろ勉強になった。特に、8月22日と23日、台湾行政院農学委員会林業試験所見学、台北植物園観賞、故宮博物館観賞、水資源・環境学会などの活動に参加させ、先生たちと出会って交流したことがとても有意義なことだった。台北で得たものは一生忘れられない大切な思い出だけではなく、これからの研究にとっても、すごくいい経験になった。今まで見たことない、気づいていないことばかりで、だから、台北での現地研究は発見の旅だった。その中で、一番印象深いのはため池、道路の名前、植物園見学とユーバイクだった。

8月21日、学生7人と先生1人と一緒に予定どおりに台北に着いた。飛行機の中で台北の桃園地域のすばらしい景色を眺めた。その中で、一番印象深いのはため池が密集することだった。それはなぜだろうか。伊藤先生が「桃園地域の用水不足で、農業用水のため、ため池を作った」と説明してくれた。どうして用水不足だか、どんなに考えても納得できなかった。また、ため池のことについて台湾の陳先生に聞いた。「ため池は桃園地域の特有なものだ。それは魚を飼うため、いろんな池を



図1 台北植物園の方々による講演を聴く日本人一行



作ってしまった。桃園地域で、魚の養殖に従事する人が大勢いる。だからこそ、桃園地域の名物は魚だ。台湾では、桃園だけ、ため池がそういう風景だ。」と親切に答えてくれた。ため池についてもっと詳しくわかってうれしかった。今は台北のため池にすごく興味を持っている。これから、もっと深く研究したい。

ホテルに行く途中に、台北の道路の名前が今中国全国の都市の名前だということを知った(写真1)。なぜかという、運転手さんが「昔蒋介石が台湾に移住したとき、故郷を懐かしむため、また、いつか故郷に帰る気持ちで、台湾の道路を中国の都市の名前で名づけした。」と説明してくれた。だから、「重慶路」「長春路」「北京路」などの名前が残してきた。確かに、台北の町でぶらぶらすると、もうすでに中国にいたという感じがかった。



写真1 台北車駅地下街 道路の名前

8月22日、水資源・環境学会の先生たちと一緒に、台湾行政院農学委員会林業試験所への見学を参加に行った。それは初めての訪問だから(写真2)、台湾側の参加者は日本語がしゃべれない方もいた。だから、発言のときは中国語から日本語、日本語から中国語の通訳が必要だった。とても不便なことだと思った。それにしても、そこで、林業試験所育林組の陳財輝先生は私たちに「台北植物園の歴史及び現状」というテーマで、植物園の歴史、変遷、現状や森、川、森林法等のことについて詳しく説明してくれた。特に、日本と植物園の深い絆を紹介してくれてありがたいことだった。台湾の「林政」は今も大変な状態で、特に東南アジアの熱帯植物の状況は厳しいという現状がわかった。そのとき、「苗圃」(なえばた)、「蠟葉」(ろうは)というような専門用語が初耳だった。台北植物園は観光地、遊休地だけではなく、自然な植物教育場所になってしまった。今の植物園の植物は、区で分類されて展示している。例えば、水生植物区、十二支植物区、民族植物区、竹区などなど、各区内の植物はそれぞれの特

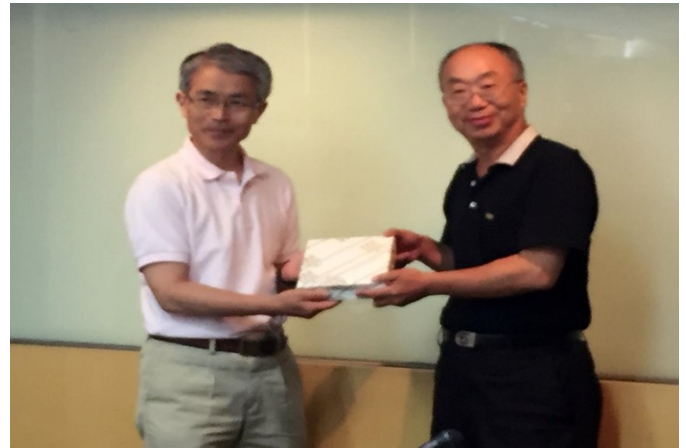


写真2 水資源・環境学会代表と台湾行政院農学委員会林業試験所組長 贈り物中

徴や機能がある。同じ区内の植物も大きな差がある。その中で、一番面白いのは、十二支植物区だと思っていた。「兎毛草」「虎耳草」のように、植物が形、使い方、地元の風俗などによって、十二支の動物で名づけされた。この区には、まったく共通点もない植物ばかりだ。不思議の同時に、当然なことだと考えた。交流会の最後、先生たちは森林法、防風林などの質問についてディスカッションした。台湾の防風林は防風だけではなく、防潮という機能もある。また、台湾の川は今も機能がだんだん失っている状態で、それは水、環境が悪くなるか、自然衰退だか、まだ研究する甲斐ある。その他、台湾の山が高いから、平地までの工場建設、排水、水処理などの問題も研究になれるようだ。学生の私たちも質問できたことは意外だった。大切なチャンスなのに、質問したけど、交流する内容と関係あるかどうか、いい質問かどうかは自信なかった。先生たちと、他の学生たちの質問と比べて、自分は勉強不足ということがはっきりわかった。

また、台北の町で歩くと、必ず写真3どおりのユーバイクが見える。これらのユーバイクは台北市内の各駅前にある。市民や観光客など、料金を出せば、誰でも自由に使えるバイクだ。また、返すところと借りるところは自由で、ユーバイクの駐輪場さえば大丈夫だ。とても便利だ。だから、使う人も増えている。市内の風景の一つになった。日本もそういうシステムあるかどうか、もしない場合は、原因は何だかは私が調べるべきことだ。

今回台北現地研究の活動はまだいろいろあった。現地研究を通して、水資源の問題、環境問題は今日日本だけではなく、台湾、世界でも深刻な問題になったということもわかった。水問題・環境問題の研究にすごく興味があるのも初めてわかった。これから

勉強し続かなければ、研究者として失格だという覚悟があった。ディスカッションの時、先生たちは研究者として、言葉が通じないけど、学問は国境がないことが感じた。また、研究は読書だけで足りなくて、外を出て研究したり、調査したり、自分の目で見に行かなければならないことがわかった。これからは自分の研究について、もっと熱情を入れて頑張っていくべきだ。今回の現地研究を参加させて本当にありがとうございました。



写真3 台北市内のU-bike

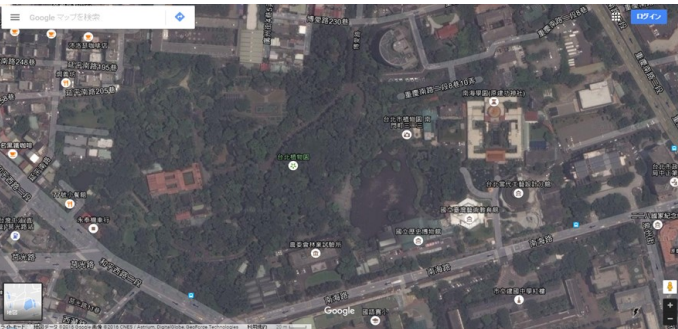


図1 台北植物園付近の航空写真（出典：Google Map）

Q&A

Q： 御植物園には、いろんな植物がいますから、植物への管理、保護、維持、栽培することもとても大変だと思っています。もし万が一、台風、大雨、土石流のような自然災害が発生する場合はそれに対する防災策がありますか。具体的な防災策を教えてください。

A： 植物園には、いろんな植物がある。植物によって、管理、栽培の方法は違う。台湾では、台風がよくあるが、だから、防災策はよく台風についての防災策だ。もし土石流などの大きい自然災害の場合は、気象庁、試験所が観測しているから、早めに防災策が実施することができる。例えば、今年の台風で、植物園には、木が倒れた状況があった。そういう場合は、管理員が倒れた木を起こして、できる

だけ生きさせていく。もし植物が死んだ場合、新しい植物を栽培するしかない。だからこそ、植物園には植物に詳しくわかる管理員が必要だ。しかし、現状は、管理員の人数は足りない状態だ。その現状に対して、ボランティアを募集して、ボランティアにトレーニングする。

水資源・環境学会の夏季見学会を参加した感想

劉 韓玲（法政大学院・人文科学学科

・地理専門）

冒頭：今度の水資源・環境学会の夏季見学会を参加していただき、誠にありがとうございます。また、さまざまな学会を参加させていただいて、いろいろ勉強になりました。知識の豊かな先生たちと交流していただき、先生達のような立派な研究者になれるように、自分が頑張らなければならない気持ちを深く感じています。

五日四泊の台北での現地調査を参加し、また、様々な学会を出席させて貰い、大変勉強になっている。台北植物園に行われた学会で、台北植物園は希少な植物を保護し、学者たちの研究に役に立っているだけではなく、一般市民を対象にして教育機能もきちんと働いているということがわかるようになった。台北植物園は、1939年に台湾総統林業試験所植物園として開園された以来、8ヘクタールの敷地内には五つの大陸から集められた1600種の植物が栽培されている。これは一つの小型の森だといえるだろう。また、無料入園ができるため、市民は自由に自然の素晴らしさが満喫できる。毎年、約20万人の観光客を訪ねる。観光客は世界に分布している植物を、この一つの植物園にみられるのが素敵ではないだろうか。それに限らず、日本の特有の建築とか、禅の文化をあらわす「枯山水の庭園」もこの植物園にみられる。さらに、台湾での昔から残される最後の一軒の役所建築—「布政使司文物館」もこの植物園に位置している。「布政使司文物館」もすでに台北市の遺跡と定めた。台北植物園はまさに自然と人文文化が完璧に結ばれていた結晶である。台北植物園は台北市民の宝だけではなく、人類の宝だと言っても言い過ぎないではないだろうか。

自分も今回の台北植物園での現地調査で、以前見

たことがない植物をいっぱい見られた。自然の豊かさと素晴らしさに頭を下げた。人類は自然を支配するわけではなく、自然と共生すべきだともう一度深く感じている。だから、人類は自分の生きている土地を守るために、まず、自然に感謝の気持ちを持たなければいけない。自然を守るのも、一人や二人かの力で全然足りないため、みんなの手を組んで、自然の美しさを残す。後代にもわれわれに感謝するだろう。自然を壊しすぎると、後輩はあまりにもかわいそうだ。なんでも希少な種類という世界は怖いだろう。



Q & A

Q： 台北植物館は毎年約20万人の観光客が来館すると資料に載ってありますが、この20万人は主に台北の市民ですか。外国人の観光客は多いですか。台北植物館はどのような宣伝をしているのでしょうか。

A： 来館した観光客は主に台北の市民です。外国人の観光客もいます。近年どんどん増えてきます。台北植物館は自分のホームページがあります。旅行会社の協力で、海外の観光客も訪ねます。

巡検報告

朱 曉蕾（法政大学大学院・
地理学専攻 修士1年）

2016年度の巡検（台湾・台北市）は、伊藤達也教授のもとで、8月21日から25日において行われた。以下にその概要を報告する。

なお、本巡検は関西グループの教授先生たち及び法政大学院国際日本学インスティテュートの院生と合同で行った。

目的

近年、環境破壊にともない、地球温暖化がますます深刻になってきた。このような背景の中で、持続可能な地球が求められている。今回は台北植物園の訪問・

見学・研究交流及び台湾政治大学民族系官大偉副教授の研究発表を通して、原点に立ち戻り、水と社会、植物及び森との関係を改めて考えていく。

台北植物園の概説

日本に統治されていた時、1896年に日本人が「台北苗圃」及び母樹園を創建し、1921年に「台北植物園」と正式に名前を更新し、台湾で初めての植物園となった。1945年に第二次世界大戦が終わった後は、林業試験所が引き継いで管理している。百年以上の歴史をもつ、敷地面積が約8.2ヘクタールの台北植物園には、裸子植物区、シダ植物区、植物分類園区、民族植物区、水生植物区、蓮池区などのそれぞれテーマ展示区がある。

そこで、一番印象に残ったのが台北植物園は356日24時間オープン制度ということである。それは現地の人だけでなく、観光客にとっても、一年中植物園を楽しむことができる。また、周知のとおり、地球温暖化を和らげる役割を果たすのが植物である。バラエティーに富んでいる植物の植物園は現代社会における植物研究及び子ども教育などの重要な場所を提供してくれたため、今後植物園は地球温暖化研究に対する大きな役割を期待される。



台湾原住民・泰雅族と川との関係—gaga

泰雅族語の中で「Imuhum」という言葉がある。それは「流動または移動」という意味である。昔の泰雅族の人々にとっては飲水、耕作、狩り、子供の遊びなどの場所であり、また、川の上流地域に住む人は狩った物を川に流し、下流に住む人に送るという分かち合い、助け合う場所でもある。このことを泰雅族の人々は「gaga」といい、即ち「分かち合い、助け合う精神」である。換言すれば、人々と川全体は一つのものだと考えられる。しかし、現代国家の建設（ex:ダムの建設）はこのような人間と自然との共生な環境を破壊してしまい、川だけでなく、その周辺にある植物を含む生態圏まで影響を及ぼし

た。また、災害を発生した時、原住民が考えたのは現代科学手段を使い、森や川などを修復するのではなく、今まで生きてきた自然との共生の知識を活かし、環境を取り戻す。

泰雅族の「gaga」という精神は現代社会において、更に広め、また、多くの人々に知ってもらわなければならない。しかし、原住民が持っている知識と現代科学の発展との衝突は避けられない。このような住民の知恵と現代科学とのバランスはどのようにとるのか。それは今持っている疑問である。

参考資料

- [1] 台北植物園 林業試験所パンフレット第126号
2015年03月
- [2] 台北植物園HP：
<http://tpbg.tfri.gov.tw/Director.php> (2016年8月31日閲覧)

Q&A

Q： 福建省は昔から台湾、沖縄と親しい関係にあります。私は福建省の出身で、前から沖縄のことについて、興味を持っております。今年の六月には、沖縄に現地調査に行ったとき、那覇にある「福州園」を訪れました。福州園の中の植物は大半福州からきたもので、その中の植物は今回陳先生が紹介されたのと似ているものが多かったです。福州は昔から沖縄といろいろな面での交流は盛んであるが、貴園は沖縄の方との交流はありますか。

A： 陳先生は本人の沖縄にいらっしゃる経験を紹介してくれました。しかし、植物園と沖縄との交流に関する答えがもらえなかったです。

台湾現地研究についての感想

程 先進 (法政大学 国際日本学インスティテュート・地理学専攻 修士1年生)

今年夏休みの8月21日、伊藤達也先生に連れて、クラスメート6人と日本「水資源・環境学会」の6人の先生たちと一緒に台湾へ現地調査をした。三日の現地調査で、非常に勉強になった。

台湾に到着した後、植物館や故宮博物館や台北の有名な町などを訪れた。幅広い植物を觀賞したり、古代から残された古物を鑑賞したりして、台湾の定番のものを食べることが非常に楽しかった。今回の現地調査は知識が乏しい私にとって、たいへん視野を広げると思っている。

一方、台湾で研究している先生と研究者たちの交流もたいへん見聞を広める。22日、台北植物園を訪

問する中で、陳財輝先生など6人の先生たちが台北植物園の歴史と現状と1895年から台北で研究している日本人研究者を詳しく紹介してくれた。陳財輝先生が発表した後、両国の研究者は自分の自然観の上で、お互いに交流した。両方とも水と緑と人間三つの関係の重要性を強調しているということがわかった。23日、輔仁大学の2人の先生を迎えるために、研究交流・懇親会が行われた。泰雅族を代表している呉豪人先生は「gaga」という基本精神の上で、水と緑と人間と人間との関係を説明した。やはり、地球環境を守る研究がすでに国際的課題になった。これは一人、一つ国の責任・義務のみではなく、地球で生きている人々と存在する国の責任だということがわかった。また、研究するとき、ただ水や緑の分野を考えるのみではなく、水・緑・人の三つの関係の上で環境問題を考えなければならないと思われる。中国では「巻の書を読むは万里の路を行くにしからず」という諺があり、台湾への現地研究はこういうものだと思っている。私たち若い研究者にとって、現地に行って、違う視野で問題を考えることが非常に重要なものと思われる。また、台湾の研究者からもらった知識だけではなく、一緒に台湾へ行く先生たちの



ところからもいろいろ勉強ができた。先生たちは自分の一生をかけて、人々が見えないところで、こつこつ地球環境を守る研究を続けている。非常に感心している。今後、わたしも地球・世界を守るために、自分ができるだけの力を入れると考えられる。

Q&A

Q： 8月22日、日本「水資源・環境学会」の若井郁次郎先生など13人と一緒に台北植物園を訪問した。自由に台北植物園の周辺地域を視察する前に、陳財輝などの先生から台北植物園の歴史と現況についていろいろ教えてもらった。大変勉強になりました。

陳財輝先生が発表した後、私は「台北植物園は台湾国民にどのぐらいの影響を与えましたか。これに対するアンケート調査はありますか。」という質問をした。



A： 陳財輝先生は「台北植物園は朝の4時から夜の10時まで入場無料で過ごせる市民の憩いの場所で、調査によって毎年の旅行者が200万人まで至るとも人気があるところです。8ヘクタールの敷地内には5つの大陸から集められた1600種の植物が栽培されています。遊んでくる人々の視野を広げることができます。植物を鑑賞するほかに、毎週の週末には、植物によく

わからない人々に植物を解説する勉強会もあり、インターネットや現場で申し込むことができます。」と回答した。陳先生は国民に対するアンケート調査が言及していませんが、台北植物園は台湾国民に与える影響をしっかりと答えくれた。非常に勉強になりました。

(編集責任 若井 郁次郎)

『水資源・環境研究』第29巻2号 目次のご案内

(電子ジャーナルへのアクセスは、<http://www.jawre.org/> → 出版物 → J-STAGE)
発行後1年間は、記事本文について学会員のみアクセスできます。
アクセスの際は事務局からお知らせする購読番号とパスワードをご利用ください、

特集「社会的共通資本論と水資源・環境保全」

1. 「水資源・環境学としての社会的共通資本論：企画の趣旨について」
宮永 健太郎 (企画編集責任者／滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)
2. 「コモンズとしての社会的共通資本とそのマネジメント」
間宮 陽介 (青山学院大学)
3. 「公共政策と社会的共通資本：社会的共通資本の論理と地方財政・地方自治体」
門野 圭司 (山梨大学)
4. 「社会的共通資本としての川：日本人の伝統的自然観と今後の川の在り方について」
大熊 孝 (新潟大学 名誉教授)
5. 「森林管理制度は社会的共通資本へと進化する」
関 良基 (拓殖大学)
6. 「社会的共通資本と専門知：鬼怒川水害と「有識者会議」を素材に」
梶原 健嗣 (愛国学園大学)

論文 (論説)

7. 「一級河川の治水負担と地方自治体 ～ハッ場ダム住民訴訟を素材にして～」
梶原 健嗣 (愛国学園大学)
8. 「共分散構造分析を用いた琵琶湖流域の現状評価に影響を与える要因に関する研究」
平山 奈央子 (滋賀県立大学) ・ 和田 有朗 (滋賀県立大学)

研究ノート

9. 「侵略的外来植物オオバナミズキンバイにフランス社会はどのように対応してきたのか」
上河原 献二 (滋賀県立大学)
10. 「兵庫県高砂市・西宮市における自主防災組織」
野田 育秀 (神戸学院大学学生) ・ 矢嶋 巖 (神戸学院大学)

書評

11. 武田史朗 (2016) 『自然と対話する都市へ：オランダの河川改修に学ぶ』 昭和堂
村上修一 (滋賀県立大学)

学会事務局からの案内と連絡

シンポジウムのお知らせ

テーマ「漁業者が語る里海の今」

主催：立命館大学OIC総合研究機構 サステナビリティ学研究センター

日時：2017年1月20日13:45～17:20

場所：立命館大学大阪いばらきキャンパスB棟1階カンファレンスホール

<プログラム内容>

- (1)挨拶ならびに「沿岸海域の生態系サービスの経済的評価・統合沿岸管理モデルの提示」の概要紹介（仲上健一）
- (2)研究成果発表
 - ・漁業者への意識調査結果（小幡範雄）
 - ・生態系サービスの経済評価（高尾克樹）
 - ・サステナビリティ評価（上原拓郎）
 - ・環境教育の効果測定（桜井良）
 - ・沿岸域の多段階管理（日高健）
 - ・里海物語（印南敏秀）
 - ・対馬・五島における海洋保護区（清野聡子）
- (3)パネルディスカッション
 - 宮城県漁業協同組合志津川支所（佐々木憲雄）
 - 日生町漁業協同組合（天倉辰巳）他

参加無料、事前申し込み制

参加申し込み先：e-mail: tyt14500@fc.ritsumei.ac.jp またはFax: 072-665-2565

原稿募集

水資源・環境学会では学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募っております。

「水資源・環境研究」は、年2回、電子ジャーナルとしてJ-STAGE上で発行しており、会員の皆様に原稿を迅速に公開し、原稿の投稿機会を増やすことを目指しております。

また、「論文（論説）」や「研究ノート」の他に、国内外における地域の話題や時事問題等をテーマにした「水環境フォーラム」、書評も受け付けております。

次号（第30巻1号、2017年6月発行予定）の締め切りは、「論文（論説）」「研究ノート」は2017年1月31日、それ以外は2017年4月30日です。

さらにその次の号（第30巻2号、2017年12月発行予定）の締め切りは、「論文（論説）」「研究ノート」は2017年7月31日、それ以外は2017年10月31日です。

投稿規程や執筆要領は学会ホームページ（下記URL）にあります。投稿希望の方は原稿送付状をダウンロード・ご記入の上、投稿原稿に添えて下記学会事務局まで電子メールにてご送付下さい。

学会誌の内容をさらに充実させるべく、皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

水資源・環境学会
事務局長 仁連 孝昭

■ 連絡先に変更はございませんか？

転居などともなう住所の変更で、学会からの郵便物が返送されて来る場合、登録いただいているE-mailアドレスがエラーで届かない場合が多数ございます。

所属先、連絡先などに変更がございましたら、下記学会事務局までご連絡下さい。

発行：水資源・環境学会

〒604-0022 京都市中京区室町通御池上る御池之町309番地 京都通信社内

<http://www.jawre.org/>

E-Mail: jawre@ses.usp.ac.jp